

# 地域を知り未来を紡ぐ「未来予想マップ」in 富岡

## ～まちへの愛着と未来像の可視化に向けた質的調査研究～

共愛学園前橋国際大学 岡井宏文ゼミ

石綿 香里・大塚 美緒・岡本 桃果・川浦 美結・武川 真叶・坪川 敬祐・  
仲松 里南・長谷部乃莞・星野裕二郎・森田 愛花・渡邊 美咲（以上3年）

本研究は、富岡にゆかりのある方を対象に、①富岡への愛着・魅力、②富岡で叶えたい夢、③理想の富岡像、④富岡の課題についてインタビュー調査を実施した。その結果、①～④いずれの項目においても、「つながり」が重要な要素として析出された。つながりを媒介にして、誇りや愛着、活躍の場、居心地の良さを生み出そうとしていくさまは、富岡の理想の未来のあり方として多くの住民に共有されていたが、そのつながりはまだまだ少ないことも同時に明らかとなった。そのため、思いを見える化しつながりを創出する仕組みとして「未来予想マップin富岡」を作成し、提案した。

## 第1章 はじめに

### 第1節 研究の背景と目的

2014年、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界文化遺産登録は、富岡のまちに大きな変化をもたらした。急激な観光地化や観光客の増加に伴い、飲食業や土産品等の小売業を中心に経済効果が生じた一方、交通機関の渋滞やまちの混雑など、地域住民の生活環境に影響が及んだ。これらに加え、近年、観光客の減少や少子高齢化／人口流出といった課題も生じている。こうした中、「富岡が今後どうあるべきか」が、行政・地域住民を巻き込みながら問われている。

こうした状況を受け、多くのアンケート調査やパブリックコメントの募集がなされてきた。しかし、こうした調査方法では住民一人一人の考えを深く知ることは難しい。

富岡にお住まいの方々には、富岡のどのようなところが好きなのだろう。このまちでどのような夢を抱いているのだろう。富岡の未来をどのように描いているのだろう。お互いのことをもっと知り合えないだろうか。夢や理想に触れあうことは出来ないだろうか。

それらをまちづくり、すなわちまちの「未来づくり」に生かせないだろうか。

本研究は、こうした問題意識から、従来のまちづくり調査が十分に明らかにしてこなかった、血の通った住民意識や未来像を聞き取り調査によって明らかにする。そして、今後のまちづくりに貢献することを目指す。

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査方法

本研究では富岡にゆかりのある方を対象にインタビュー調査を行った。血の通った住民意識や未来像を明らかにするために、①愛着・魅力、②夢、③理想の富岡像、④富岡の課題・取り組みについて具体的なエピソードや展望などを伺った。調査期間は2021年11月から2022年1月で、14名の方にご協力いただいた。実査にあたっては、あらかじめ質問を用意しつつ、回答に応じて内容をより深く掘り下げていく半構造化インタビューの手法を用いた。

## 第2節 結果の概要

今回14名の方にインタビュー調査を行った。ご協力いただいた方の基本属性とそれぞれの調査項目に対する回答の概要は以下のとおりである（表1）。それぞれの項目に対する回答は、非常に多様であることがわかる。愛着は、場所だけでなく人やエピソードなどに及んでいる。夢では、より良い景観、活気、にぎわいの創出、新たな活動への意気込みなどが語られている。理想では、「大宮から富岡までの馬車の旅」「語り明かせる飲み屋」など具体的かつ楽しい理想の姿から、地域への愛着を取り戻したり、記憶を継承したり、住民も観光客も楽しめる町、幸せになれる未来といった抽象的でありながらも温かな未来が語られていることがわかる。課題では、失われてしまった活気を取り戻すことや、富岡で活躍するプレイヤーが求められていた。次章では、なぜこのような語りが得られたのか、実際の語りをもとに見ていくことにしたい。

表1：インタビュー調査の結果の概要

	基本属性	愛着	夢	理想	課題
大塚さん	女性／30代	扇屋	レトロと新しいが癒合しているまち	若者の目的地	映えが撮れるように
黒澤さん	女性／20代	学校の帰り道	富岡で旅館	富岡でサービスを	賑わいが欲しい
ダミアンさん	男性／30代	妙義山とまちなかのコントラスト	ペタンクで交流	観光客も地元の人を楽しめるまち	プレイヤーの発掘
寺澤さん	男性／30代	妙義の景色	オルタナティブスクールを造る	皆が幸せになれる未来	課題はない
馬場さん	男性／30代	ストーリーが大切	かっこいい大人との関わり	みんなが主役	プレイヤーがほしい
濱田さん	女性／NA	浅香入集落、自宅、富岡の人	自宅を楽しい場所にする	仲間を増やすこと	「何もないよ」と口にする
藤井さん	女性／20代	妙義の紅葉・シルエット	地域の情報の発信	妙義の空き家の活用	若者向けのカフェ、フォレストパーク
渡邊さん	男性／NA	富岡の人の熱意がすごい	サステナブルな未来を創造	お店をEnergySpotに	富岡の魅力に気づけていない
茂木さん	男性／NA	貫前神社の下り参道	貫前神社	知名度アップ	人口減少
吉田さん	女性／NA	中学校からの帰り道	シルクと古民家で活性化	富岡の人に恩返し	想いをつなぐ
Aさん	女性／NA	一峰神社、城山の桜、妙義神社、貫前神社	富岡製糸場とまちの活気をもう一度	製糸場の記憶を受け継ぐ	思い出を残したい
Bさん	男性／70代	神楽川、白山の桜、一峰の桜	自然を活用した生活の仕方、若い人たちに気づいてほしい	活気あった工場をもう一度取り戻したい	若い人がいない 年配者には住みづらい
Cさん	男性／30代	アクションがつながる。	店舗と地域が深く関わるリサイクルループ	子ども、若者たちの地域愛の形成	人口減少 歴史の継承
Dさん	女性／20代	思い出のある安心できる場所	優しさが壊れて欲しくない	語り明かせる飲み屋	車を持たない人にとって住みにくい

## 第3章 語りに触れる

本章では、それぞれの質問項目についての特徴的な語りを参照しながら、実際にどのようなことが語られたのかを読み解いていくことにしたい。

### 第1節 愛着

富岡の人々は、富岡の何に思いを寄せているのだろうか？愛着に関する語りから読み解いていく。

**【私だけのお気に入り】**

吉田さん：「中学校からの帰り道が結構。城跡なんですよ中学が。だから結構坂になっててその途中で友達と一緒に遊んでたっていうか、ずーっと喋ってた時の風景は結構覚えてます。富岡が一望できるじゃないですか。——（城跡から）富岡が見えて、でも妙義山ほど高くないで、親近感も湧く感じだし、一望できるから自分が育ってきたなって感じが好き。——座って喋っていると近所の人も話しかけてくれて、交流が生まれていた」

Dさん：「（山公園略してやまこうや桐淵公会堂で）DS持って遊んだり、BB弾拾って遊んだりしてました——めっちゃ漠然とした言い方だと、安心できる場所って感じですかね。」

これらの語りからは、富岡周辺の様々な場所や風景が愛着のある場所として挙げられた。しかし、これらの場所は、単に場所としてあげられたのではなく、友達との思い出や交流など過去の記憶や体験と結びつきながら語られていることがわかる。つまり、こうした記憶・体験と結びつくことで、ある人にとって、ある場所が特別になり安心感や愛着を生み出しているのだ。とりわけ、友達や近所の人とのつながりは、愛着を生み出す大切な要素であることが分かる。

**【まちで生まれるつながり】**

馬場さん：「人によってそういう愛着が生まれてきてるっていうか、そういう人たちのつながりがあるからこそあって愛着が生まれる。——ストーリー性のある、物語のあるお客さんに出会えた。——（まち中で）いろんなお店が仕込みをしている時の香り・匂いが（どうしようもなく好き）」

飲食店を営んでいる馬場さんは、ストーリー性・物語のある人とのつながりから生の実感（街中を歩いているときの香り・匂い）に愛着を持っている。そこから言えることは、特定の場所や光景ではなく、人に対して愛着を持っていることがわかる。直接人と関わってなくても、匂いなど（生活感）から人とのつながりを感じている。

**【こだわり&プライド】**

渡邊さん：「おかって市場など地域で作られた野菜や特産物などを販売しているところがあるのですが、僕的にはオススメです。——他には『baimai』というカレー屋さんですかね。——食材にこだわりつつ、しっかりとした料理だったり特産物だったりなどに富岡の魅力を感じます」

元々食に関わる仕事をしていた渡邊さんは、富岡で生み出される食材へのこだわりや次世代に仕事をつないでいこうとする心意気に愛着を感じている。ただの野菜、料理ではなく、背景にある生産者や職人の思いの強さが垣間見えることで愛着を生み出していることがわかる。この愛着は、地元の生産者とのつながりの中で育まれたものだった。

**第2節 富岡で叶えたい夢**

次に、富岡で叶えたい夢について見ていこう。富岡の人は、富岡で何を夢見るのだろうか。

**【つながりへの期待】**

ダミアンさん：「ペタンク（フランス発祥。老若男女に愛されている球技）を市民とか他の人たちと一緒にやっている風景が見たいですね、一年後。それが結構当たり前になってるといって、富岡の例えば公園、まちな

かの公園は綺麗な公園はあるんですけど、あまり人の気配がないというのがすごい気がかりで、世代間とかの交流にもつながるようなペタンクが気軽に行われている風景が見てみたいですね。人が交流できることがとても重要なことだと思います」

渡邊さん：「コーヒーの豆かすをきっかけにいろんな方とつながることができて面白いですね」

Cさん：「僕の中での野望の一つなんだけど、リサイクルループみたいなのができたらめっちゃ面白いなって思ってて——使った繭、蚕でできた生糸で、本当にうちの製品とか作って欲しいなって。それを販売することによって富岡のお客様が買ってみたい、使ってみたくて、それを使ってる自分が誇らしいみたいな、地元愛みたいな、そういうなんかことができたらめっちゃ面白いなって」

フランス出身の市観光協会で働くダミアンさんは、フランスの球技ペタンクが行われている光景を見るのが夢だ。まちなかの公園で色々な世代の人がペタンクを通じて「気軽に」「手軽に」交流している光景だ。市内のコーヒーショップで農家さんと協力して豆かすの再利用に取り組む渡邊さんとCさん。渡邊さんはこのつながりを通じて、野菜の生産や、地元の方とサステイナブルな未来を一緒に作ることを夢んでいる。Cさんは富岡の繭や生糸と自社製品とのコラボがしてみたいと語った。地元のつながりを生かして地元への誇りや愛を生み出す製品をつくるのが出来ればと考えている。ダミアンさんはペタンクを通じて市民同士や市民と富岡を訪れてくれる人、世代を超えたつながりをつくりたい。渡邊さんとCさんはつながりから製品、誇りや地元愛を生み出したい。これらの語りからは、つながりそのものを生み出すこと、つながりから何かを生み出すこと、双方が夢として現れていることがわかる。

#### 【カッコいい大人から、子どもたちへのバトンパス】

馬場さん：「俺子ども四人いるんだけど、子どもたちが育っていくのにいずれ故郷になるのが富岡になるんだってのは少し良くしたいなっていうそういう思い」

馬場さん：「ここに来ればカッコいい大人がいるっていうのがあったわけ。だけど今はなかなか学生と接する機会がなくて。昔はあったんだけどそういうのがなくなっちゃって。少しでも子どもたちに何かが芽生える思いとかを残していけたらなって。そういうのを自分たちでも伝えていきたいなって」

料理人の馬場さんは4人の子どもを育てている。富岡は、子どもたちにとっていずれ故郷になる場所だ。だからこそ少しでも良くしたいと考えている。マルシェやイベントを通じて、カッコいい大人に会える場所を作りたいと考えている。カッコいい大人と子どもや若者がつながった思い出が、ゆくゆくは彼らの愛着になってほしいと願っている。

#### 【忘れられないつながりの記憶が故郷になる】

Cさん：「(コロナ禍で地域との関わりが築けない中でも)『インターンでこんな体験ができたよー』っていうのがあったら案外記憶に残るんじゃないかって。そういう活動ができたらいいなって思ってたね。——触れ合って、終わった後もどこかで会った時に『あー久しぶり』みたい(に言い合える)そういう関係性が築ければ。いつか(高校生たちが)大人になった時にそれ(インターンで出来た関係性)を覚えてる人たちが地元で何か残してくれるんじゃないかなって。それで今回のインターンやるんだったら徹底的にやって記憶に残らせて、忘れられない体験にしようみたいな——地元の方々が地元、このお店を愛してくださって自分が成長してもここで働きたいって思ってもらって、巣立って行って、将来自分がある程度成熟した時に帰ってきてもらえるような状態が作れたら嬉しいなって」

Cさんは勤務しているお店でインターンを受け入れている。高校生に大人との関わりを持ってもらいたい。仕事を通じて関わった記憶や関係性が、将来新たな活動につながってほしいと願っている。

### 【自分たちでめっちゃめっちゃ楽しい場所をつくっていく】

濱田さん：「(群馬には、富岡には『何もない』とよく言われるけれど) じゃあ、まず、富岡には濱田さんちがあるじゃんってなればいい訳で、この家とこの敷地の中をめっちゃめっちゃ楽しい場所にする。富岡の人が休みの日とりあえず濱田さんち行くとなんか楽しいことあるよね、面白い仲間いるよねってそういう場所にすれば、富岡の人が富岡なんてなんにもないよって言わなくなるかなと思って、そこをちょっとやりたいな」

移住コーディネーターの濱田さんは、富岡と一緒に楽しむ仲間を増やしたい、自分のできる範囲で富岡をどんどん楽しい場所にしていきたい。このことが富岡を「何もない」のではなく「何かある」場所に変えていくと考えている。

### 【若者の夢・距離感】

では、若者たちは何を願うのか。どのような場所であってほしいのか。

吉田さん：「みなさん富岡が好きでここまでやってくれているのでここまで自分が経験させてもらえた恩返しをしたい」

黒澤さん：「大学生で富岡の町おこしをしたいですねー。——有名になるような旅館を作りたいです。——(そのために)若い人たちを集めたいです。あと、本気で富岡に力を尽くしてくれる人に助けを求めたいです」

藤井さん：「(富岡を出る考えは) 全くない。(富岡が) 普通にただ、好き」

Dさん：「(富岡を離れても) なかなか帰れないってなんかやだなー」

若者達と富岡との距離感はさまざま。大人たちの夢に共鳴して「恩返し」をする場、夢を実現する場、何か活動をするわけではないけれど理屈抜きで好きな故郷であり続けてほしいと考えている。

## 第3節 理想の富岡像

次に、理想の富岡像についてみていこう。富岡の人は、現在地からどのような未来を描くのだろう。

### 【あの光景をふたたび】

Aさん：「——住民は『製糸場なんて』って思ってしまったのかな。当たり前すぎて。来てみれば製糸場の魅力が分かるんだけど。それをまちに住んでいる人たちが理解してないの。——私自身、好きな場所ではあるけど、そこまで深く知っている訳じゃない。でもやっぱり、このまちには製糸場があって、そこが私たちを守ってくれていた、寄り添っていたってことを覚えていて欲しいな。——地元の人たちも、今、若い人とかだと、ここで育っても、富岡製糸場がこんなにすごい場所なのかって気づいていない」

Aさん：「私、北売店(注：製糸場内の中にある)で働いている時に、地方から来た観光客の人が、製糸場に来て『懐かしい』って言っていたの。当時、製糸場に奉公に来ていたみたいでね。涙を流して喜んでたのよ。当時の写真も見せてくれて。それを見て私も嬉しかった」

Bさん：「——2013年に製糸場が世界遺産に登録されたときは、活気があって当時（稼働していた時）の面影に酷似していた。——製糸場が稼働していた、あの光景をもう一度みたいよ。あの空間の中で、あれだけの人が同時に機械を前に仕事をしていたのは、衝撃的だった。——目的は違っても、製糸場に人が集まるのは、僕等世代のロマンがたくさん詰まっているから」

富岡製糸場に思いを寄せる二人。二人はかつての製糸場を中心とした活気溢れる光景を知っている。Aさんは製糸場がまちの人を守り寄り添っていたことを覚えて欲しいと願っている。Bさんは活気を取り戻したいと考えている。往時の光景にはロマンが詰まっており、製糸場への思い入れや記憶で、他者と共鳴することも出来るからだ。

### 【みんなとつくる明るい未来】

馬場さん：「自分がきっかけでいろいろな人たちがつながっていけばいいな。その人たちが主体・主役になって。——イベントがまちの風景の一つになって、それをやることで色んな人にスポットライトがあたるような街になって欲しい」

馬場さん：「お弁当を作るのがとにかく大変って。お母さんみんな大変だよ。高校生だけじゃないけど、富岡駅の前に販売所作って、サブスクって言うんだっけ？その定額制にして、来た子が、『はいお弁当』って帰りにボックス作っという、そこにどんどん入れてってもらって。俺が仕事終わりに回収して洗って、数どれくらいかわかんないけど。そういうのを定額制にしてやったらいいんじゃない？とか。まあいろんなお弁当屋さんがあるじゃない？それが地域で賄えたらいいよねって」

濱田さん：「京都とかと比べたら京都には二条城もあれば三十三間堂もあって、そんなもの今更富岡に作っても意味がないって言うか。あれがないこれがないって言うてもしょうがないから『あるもので満足して自分たちで作れるものは自分たちで作る』って言うことが大事だと思うんですけど。住んでいる一人一人が富岡ってどういうまちなんだろうって言う、富岡の強さも弱さも、いいところも悪いところもちゃんと向き合って、受け止める。受け止めた上でじゃあ自分は何ができるのかって言うのを考える、それが必要なのかなって思いますね」

馬場さんは、イベントや新しい取り組みを通じてみんなが主役になれるまちになって欲しいと願っている。濱田さんは、富岡に来るまで、色んなまちを見てきた。濱田さんは、富岡を何もない場所でなく、何かある場所にしたい。そのために一人一人が自分たちのまちの個性を受け止めた上で、何ができるのか考えてほしい。それが、富岡を、他のどのまちでもない特別な場所に変えていくからだ。

### 【地元の人も観光客も楽しめる富岡に】

ダミアンさん：「できれば地元の人をもっと地元を楽しんでいる、自分もそれを楽しみたいという暮らしをしたいですね——友達と一緒にまちなかの飲食店に行ったり、色んな体験をしたり。そういうような暮らしができればいいですね」

ダミアンさん：「体験型コンテンツ、観光協会も求めていると思いますし、地元の人もそれを身をもって体験したことはすごく印象に残ると思うので、体験物が必要ですね」

大塚さん：「個人的な意見でいうと、若い人、20代・30代とかの人が富岡市に行こうっていう目的を持ってくれる、目的地になってもらいたいなっていうのがあって——遊びに行こうよってなったときに、選択肢に富岡市を入れてもらえるような魅力を作っていききたいなというのはあるんですよね——今ほんとに魅力的なお店っていっぱいあるなっていうのをすごく感じてるので、そういうのを知ってもらってPRをしていききたいな～とは思うんですよね」

お二人は富岡市の観光協会働いている。市の職員としてではなく一住民として考える理想の富岡は次のようなものだ。ダミアンさんは、観光客だけでなく地元の人が地元を楽しめる暮らしができるまちにすることを理想としている。大塚さんは若者が訪れたいくなるようなまちが理想だ。近頃増えてきたお店はどれも個性的で魅力的だが、まだまだ多くの人には知られていない。だからこそ、個人でもまちの魅力を伝えていきたいと考えている。

#### 第4節 富岡の課題とその取り組み

最後に、富岡の課題についてみていこう。富岡の人は、富岡に何を求めているのだろうか。

##### 【学生時代からずっと思っていたんですが...】

Dさん：「中学・高校の頃から思っていたのは、電車の料金もっと安くなれって感じですね。難しいんですけど。たぶん若者にとっては住みづらくなって。車持ってないとかですかね。——逆に車に乗れなくなった高齢者も大変なのかなって」

##### 【プレイヤーが必要不可欠】

馬場さん：「思ってるだけではつながらなくて、俺がここでお店をやることによってつながってやっていけたらいいとか。——古民家の話、若い子がやりたいんだなって。プレイヤーがいないわけ、それを支援する大人がいて。若くて知識が無いから分かんないわけじゃない。だからそういう人たちが、協力することによって、それが生まれれば活性化にもなるし。それをやるとまた違う子が出てきて、それがどんどん増えていくことによって、プレイヤーが増えていくことによって、なんていうかな、賑わうというか。——現状でやっぱりそういう人が少ないし、富岡って若い子が少ないから」

富岡は愛すべき場所であり、叶えたい夢や理想の姿を想像することが出来る場所である。

しかし、そのポテンシャルが十分に生かされているわけではない。不便さ故の住みづらさや若者人口の少なさ、何かを始めたい若者のつながりにくさが課題として挙げられた。前節で見たように、「カッコいい大人」たちの活動は、若者に届いている。しかし、すべての若者にではない。だからこそ、若者たちとつながり、受け入れ、活力を生み出すサイクルが求められているのだ。

以上四つの項目について、主な語りを概観した。次章ではこれらの語りについて考察を行っていく。

## 第4章 考察

本章では、第3章で得られた結果を基に、それぞれの項目「愛着」「夢」「理想像」「課題」が、どのような要素から構成されていたのかを整理していく。

富岡の人々は、富岡の何に愛着を抱いていたのだろうか。語りからは、多様な愛着のあり方がうかがえる。お気に入りの場所と光景、そこで生まれた交流と記憶、「物語」をもつ人とのつながり、香りや匂い、その背後にある人がそこにいる実感と安心感、地域の生産者の誇りを感じるものが身近にあることなど、多様な

愛着のあり方が明らかになった。

愛着は、単に場に対して抱かれるものではなく、交流や記憶、生の実感、誇りなどその場を特別にする体験や記憶、感覚が重要であることがわかる。とりわけ他者との交流や共鳴は、多くの語りで認められた要素であった。

次に夢についてみていく。すでに富岡で活躍をされている方々は、地元で自分が何が出来るのかを具体的な言葉で語ってくださった。豆かすを媒介にしたつながり、繭や生糸と自社製品とのコラボ、地元のつながりを生かして地元への誇りや愛を生み出す製品をつくること、「ペタンク」で地域のつながりを作ること、かっこいい大人の姿を子どもたちに見せること、富岡を巣立った人たちが戻ってきて活躍できる場所であること、若者たちに富岡には「何もない」のではなく、何かあると思わせる環境を作ることなどが挙げられた。

すなわち、大人たちの夢は活動や世代のつながりやサイクルを生み出すことで、誇りや愛、活躍の場、居心地の良さを作り出していくことと深く関わっているのだ。

では、次世代の若者たちは何を夢見ているのだろうか。自分がしてもらったことに対する恩返しをしたい、「普通にただ、好き」な富岡に居たい、今後巣立ったとしても気軽に帰れる場所であってほしいといった事柄が挙げられた。町との距離感は様々だが、「恩返し」の気持ちの芽生えは大人たちの取り組みの一つの成果だろう。また、居心地の良い場所としてあり続けてほしいという願いは、若者たちに共通するものであった。

次に理想像についてみていく。何があることが、何が出来ることが、理想の町をつくるのだろうか。往時の光景・活気・ロマンを再び取り戻すこと、今を生きる人とそれを共有すること、往時の記憶を媒介に共鳴できること、製糸場の魅力を共有できること、色々な人にスポットライトが当たること、お互いがつながりあうことで地域課題をアイデアで解決できる仕組みがあること、良いところも悪いところも含めて地元をよく知り、一人一人が何をしたいのか考えられること、地元の人が楽しめること、ここでしか出来ない体験があること、それが愛着を生み出していくこと、若者の目的地、町の魅力的なお店を知ってもらうこと、自分がそれらをPRしていくことなど、様々な事柄が挙げられた。

富岡には愛着・夢・理想像がたくさんある。しかし課題もある。そのポテンシャルが十分に生かされていないのだ。不便さ故の住みづらさや、何かを始めたい若者のつながりにくさが課題として挙げられた。もちろん、不便さを不便とも感じない人や積極的につながりを持つとする若者もいる。しかし、現状はどちらも少数派だ。改善できる取り組みが求められている。

以上、「愛着」「夢」「理想像」「課題」について整理してきた。これらの事柄から示唆されることは何だろうか。愛着を見ると、その場を特別にする体験や記憶、感覚を生み出すものは、他者との交流や共鳴であった。交流や共鳴、すなわち「つながり」は、愛着だけでなく夢や理想像、課題においても重要な要素であった。つながり（やそのサイクル）を媒介にして、誇りや愛、活躍の場、居心地の良さを生み出していく様は、富岡の理想の未来のあり方として、今回インタビューに答えてくださった多くの方に共有されているものである。しかし、同時にそれは課題でもあった。夢や理想で語られたつながりは現実に生まれてはいる。しかし、そのつながりはまだまだ少ないという現実も同時に横たわっている。夢や理想像は、今まだ得られていないから夢であり理想なのだ。ではこれらの課題を克服し、他者との交流を喚起し、つながりを作り、共鳴し、新しい富岡を作っていくにはどうすれば良いのだろうか。この課題に対し、実際の仕組みの提案を持って挑みたい。

## 第5章 未来を紡ぐ未来予想マップin富岡：今と今、未来と未来、未来と今

### 第1節 未来予想マップ

ここまで、住民一人一人の語りを読み解いてきた。すべての語りにおいて「つながり」は重要な要素であった。夢や理想で語られたつながりは現実に生まれてはいる。しかしそのつながりはまだまだ少ない。では同じような思いを持っている人とつながることが出来るようになるにはどうすれば良いのだろうか？



隣人の思いに触れるために、思いを見える化できればより多くの思いに触れることができ、つながりを生み出すことが出来るのではないだろうか。新しいつながりを増やしていくために大きな紙の地図とアルバム、アルバムの電子版、語りの記録からなる「未来予想マップ」を作った。それぞれの機能と関係性は次の通りである。

- 【①大きな紙の地図】 大きな紙の地図は、住民の愛着・理想・夢・課題の4項目を富岡の地図に落とし込んだものである。4項目をさらにカテゴリズすることで、共通した思いを探することができる（図1）。
- 【②思いに出会うアルバム】 思いに出会うアルバムは、調査した人々の語り（思い）をスクラップブック式にまとめたものだ。地図の傍らに添えられる。地図に書かれた番号とアルバムのページ数がリンクしており、地図からアルバムにジャンプすることが出来る。地図よりも詳細な思いに触れることが出来る。実際に目で見て触れることが出来るアナログな地図とアルバムは、幅広い世代を結ぶ。世代を超えて思いに触れることが出来る。「こんな人がいたのか」「この人はこんなことを考えていたのか」と、これまで知らなかった人や思いに出会うことができる（図2）。
- 【③思いに出会うアルバムの電子版：Instagram/Facebook】 思いに出会うアルバムの電子版である。①と②に加えて、インターネットを介することで、富岡の人の思いやころざしやアイデアを、富岡内外のより多くの人に向けて発信できる。若者が親しんでいるツールを用いることで、若者とのつながりにくさ、若者が「かっこいい大人」に出会うきっかけにもなる（図3、4）。
- 【④語りの記録】 ①～③の根底に位置する心臓部、詳細な語りの記録である。本稿第3章でみたような住民の生の声に深く触れることが出来る。



図1 大きな紙の地図



図2 思いに出会うアルバム



図3 思いに出会うアルバムの電子版：Instagram



図4 思いに出会うアルバムの電子版：Facebook

## 第2節 「未来予想マップ」の意義

「未来予想マップ」の意義はなんだろうか。「未来予想マップ」は、これらの①～④が連動することで機能する。さらに一度作って終わりではなく、人の思いは蓄積され続ける。アルバムの冊数もSNSの投稿も日ごとに増えていく。思いは蓄積し、出会いの可能性も増えていく。

「未来予想マップ」は時間と空間を超える。「未来予想マップ」は今を生きる人同士をつなぐだけでなく、未来において未来に生きる人同士もつなぐ。同時に、未来に生きる人は、過去の人の思いに触れることができる。「未来予想マップ」は、人と思いの保管庫なのだ。「未来予想マップ」は今を保存する。

いつかの未来、馬場さんのお子さんが、今（過去）の馬場さんに会うことが出来る。父親がかつて富岡で何を思い、子どもたちに何を伝えようとしていたのか、何をしようとしていたのかに触れることが出来る。

かつて誰かが夢見た「未来」に触れることが出来る。ペタンクは富岡で愛されているだろうか。豆かすや繭は、新しい製品を生み出しただろうか。製糸場のロマンは誰かと共有できただろうか。何かある、「めちゃくちゃ楽しい場所」になっているだろうか。

いつかの未来の富岡は、どこから来たのか。誰と誰の思いがつながって、今に届いているのか。それを知ることが出来るのだ。

これから、富岡ではどんな未来が紡がれていくのだろうか。願わくば、「未来予想マップ」がその傍らにあってほしいと願う次第である。

## 謝辞

本研究の実施に当たっては、富岡にお住まいの方々や富岡で活動されている多くの方にお世話になりました。

身近に、こんなにも面白いことを考え、こんなにも富岡に情熱的で、こんなにもかっこいい大人の方々に出会えて、幸せでした。富岡に住んでいる、誰かの思いに触れること、それをつなげる橋になれたことを誇りに思います。お話しいただいた多くの語りをまだまだ紹介できていませんが、今後なんらかの方法で発信をしていきたいと思っています。

大変お忙しい中、快く迎えてくださり、また沢山お話をしてくださり、本当にありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。調査も「未来予想マップ」もこれで終わりではありません。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 参考文献

共愛学園前橋国際大学岡井宏文ゼミ「富岡製糸場聖地化プロジェクト～世界遺産観光地の再活性化に向けた調査研究～」『絹ラボ研究成果報告書』共愛学園前橋国際大学岡井宏文ゼミ2021年

富岡市役所『観光戦略プラン（案）』2021年（<https://www.city.tomioka.lg.jp/www/contents/1617083689505/files/sennryakuplan.pdf> 最終閲覧日：2022/01/27）

富岡市役所『富岡製糸場周辺のまちづくり事業のアンケート』2017年（<https://www.city.tomioka.lg.jp/www/contents/1520555777993/index.html> 最終閲覧日：2022/01/27）

丸山奈穂「世界遺産登録に対する住民の態度」『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第22巻第1号 2019年8月 1頁～11頁